

第 36 回（'26）書学書道史学会大会

主催：書学書道史学会

後援：公益財団法人前橋観光コンベンション協会

今年度の大会は、10月24日（土）・25日（日）の両日、群馬大学荒牧キャンパスにおいて開催します。

詳しいプログラムは3頁のとおりです。今年度も研究発表に加え、記念講演とシンポジウム、会場校による特別展示を企画しております。多数のご参加をお待ちしております。

開催に関する最新の情報は学会ホームページでお知らせいたしますので、本状発送の後も随時ご確認ください。またホームページには、本状のデータを掲載しますので、適宜ご利用ください。

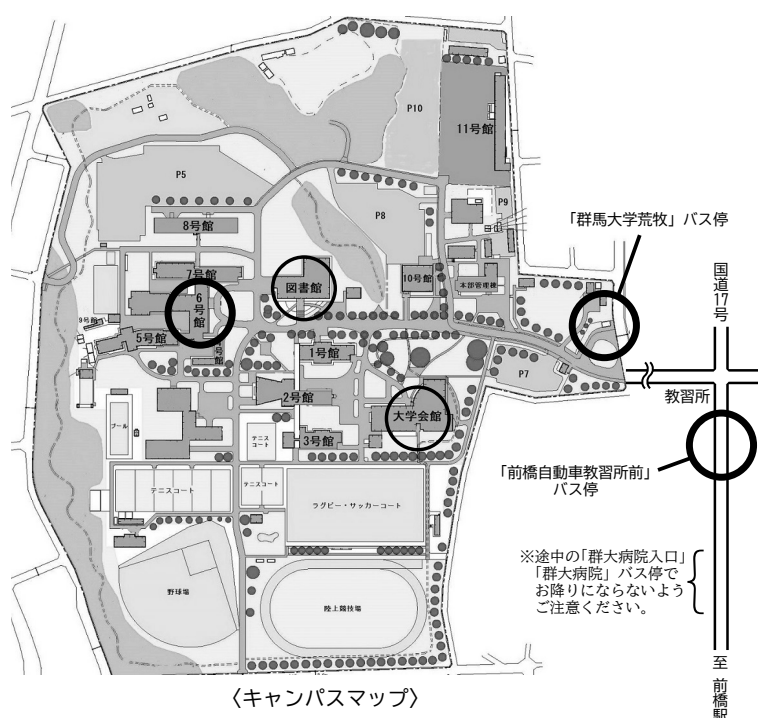
なお、本大会は、公益財団法人前橋観光コンベンション協会様よりご賛助をいただいております。ぜひ会場でのご参加をくださるようお願いいたします。

10月24日（土）

12:00	受付開始
12:50～13:40	開会式・総会
13:45～14:45	研究発表
15:00～16:40	シンポジウム
16:55～18:30	懇親会

10月25日（日）

9:40	受付開始
10:10～11:40	研究発表
13:00～14:00	研究発表
14:10～15:20	記念講演
15:20～15:30	閉会式



群馬大学荒牧キャンパス 〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

JR 前橋駅北口2番バス乗り場より会場の6号館（C棟）までのアクセスは、以下のとおりです。

- ・ 関越交通バス「群馬大学荒牧行」「群馬大学荒牧経由 渋川駅行」「群馬大学荒牧経由 渋川市内循環 渋川駅行」にて「**群馬大学荒牧**」下車。徒歩10分。
- ・ 関越交通バス「渋川駅行」「渋川市内循環 渋川駅行」「道の駅まえばし赤城行」にて「**前橋自動車教習所前**」下車。教習所を左手に見て前方の交差点を左に曲がり直進。徒歩20分。

大会開催前後のバスは以下のとおりです。一部、続行便も運行されますのでご利用ください。「前橋駅」⇄「群馬大学荒牧」「前橋自動車教習所前」間の運賃は、**片道450円**です（Suica等交通系ICカード利用可。乗車時・降車時それぞれ1回タッチ）。

- ・ 10月24日（土） 「前橋駅」**11:10 発**「群馬大学荒牧行」 → 「群馬大学荒牧」11:44 着 ※2号車運行
「前橋自動車教習所前」19:03 発「前橋駅行」 → 「前橋駅」19:26 着 ※2号車・3号車運行
- ・ 10月25日（日） 「前橋駅」**8:58 発**「群馬大学荒牧経由 渋川市内循環 渋川駅行」 → 「群馬大学荒牧」9:19 着
「前橋駅」**9:17 発**「群馬大学荒牧行」 → 「群馬大学荒牧」9:42 着
「前橋駅」**9:30 発**「群馬大学荒牧経由 渋川駅行」 → 「群馬大学荒牧」9:52 着
※8:58 発、9:17 発への分散乗車にご協力ください。
「群馬大学荒牧」16:00 発「前橋駅行」 → 「前橋駅」16:25 着 ※2号車・3号車運行

大会関係各種連絡事項

- 大会参加申込みは、10月9日（金）までに下記の URL または二次元コードから申込フォームにアクセスしていただき、必要事項を入力の上ご送信ください。締切厳守をお願いいたします。なお、大会当日の参加受付はいたしかねますので、事前の申込みにご協力ください。また、電話による申込みも応じかねます。



<https://forms.office.com/r/fq2ihR95rS>

- 入力項目は、会員ご本人の①氏名（よみがな）、②所属、③メールアドレス、④群馬県在住／非在住の別、⑤参加希望日および参加方法、⑥懇親会参加希望の有無、⑦25日弁当注文の有無、⑧会員種別、⑨同伴非会員の有無（予定する場合は、その方の①～⑦の情報と学籍の有無）です。
- 申込フォームにアクセスが難しい場合は、葉書で4頁の事務局までお知らせください（書式自由、上記期限必着）。上記①～⑨の項目と、会員ご本人の住所、電話番号もご記入ください。
- 大会参加費（資料代を含む）および懇親会参加費は、同封の「振込取扱票」に必要事項をご記入の上、10月9日（金）までに納入してください（合計0円の場合は不要です）。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。25日の弁当代については、会場受付時に現金にてお支払いいただきますので振込されませんようご注意ください。
- なお、年会費との合計金額の入金は禁止します。やむを得ず払込票を利用せず、口座に直接参加費を入金する場合は氏名の頭に「0」を付けて入金してください。会場では、弁当代を除き現金を取り扱いません。懇親会費振込後に参加者のご都合によりキャンセルされる場合、返金には応じかねますので、あしからずご了承願います。
- 今回の大会では、会員1名につき非会員2名の同伴参加を認めます。非会員の同伴を予定している会員は、上記の申込フォームに同伴非会員の情報も登録してください。また、上記の「振込取扱票」により同伴非会員の参加費（大会・懇親会）も合わせて納入してください。
- 大会参加費は、一般会員（名誉会員・特別会員・賛助会員含む）が2,000円（同伴非会員も同額）、学生会員は無料です（同伴非会員が学生の場合は無料）。懇親会参加費は、一般会員・同伴非会員が5,000円、学生は会員・非会員を問わず2,500円です。

	大会参加	懇親会参加	計
一般会員（名誉会員・特別会員・賛助会員含む）	○	○	7,000円
学籍を有さない同伴非会員	○	×	2,000円
学生会員	○	○	2,500円
学籍を有する同伴非会員	○	×	0円

- 今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、大会の模様をオンラインで配信いたします。この場合でも、一般会員には上記の期限までに参加費の納入が必要となります。オンラインでの参加を希望する方は、上記の申込フォームの所定欄に入力してください。大会1週間前までに参加方法をメールにてお知らせします。
- なお、オンライン参加会員による非会員の同伴、また同伴非会員のオンライン参加はできません。
- 本状は大会当日にお持ちください。会員の確認として使用する場合があります。
- 会場近くの飲食店・コンビニが限られますので、25日のお弁当の注文も承ります（上州御用登利平「鳥めし（松）」1,000円、参加申込時要予約、会場受付時現金払）。お弁当やご持参いただいた昼食は、会場と同じフロアのC202でおとりいただけます。
- 宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、各自で手配していただくこととし、事務局では手配いたしません。
- 今大会では、ご後援をいただいております公益財団法人前橋観光コンベンション協会様に参加者名簿（氏名と群馬県在住／非在住の別）を提供いたしますので、ご承知おきください。
- 学会からの派遣申請書が必要な方は、学会ホームページにPDFファイルを掲載しておりますので、印刷の上ご利用ください。

第36回（'26）書学書道史学会大会プログラム

10月24日（土）

於：群馬大学荒牧キャンパス 6号館（C棟）C204

12:00 受付開始

12:50～13:40 開会式・総会

13:45～14:45 研究発表

- ① 13:45～14:15 「梅舒適の篆刻作風について ―造形志向への転換期を中心に―」

藤井郁子（関西大学大学院）【司会：剣持翔伍】

- ② 14:15～14:45 「民国期における篆刻の流派観 ―「徽浙兩宗」の対立と融合をめぐる―」

林 崇威（筑波大学大学院）【司会：権田瞬一】

15:00～16:40 シンポジウム「近代東アジアの〈官展〉と書」

柳田 さやか 氏（島根大学）

金 貴粉 氏（国立ハンセン病資料館）

柯 輝煌 氏（東京大学大学院）

徳泉 さち 氏（日本大学）

【司会：菅野智明】

16:55～18:30 懇親会 於：大学会館（生協食堂）

10月25日（日）

於：群馬大学荒牧キャンパス 6号館（C棟）C204

9:40 受付開始

10:10～11:40 研究発表

- ③ 10:10～10:40 「江戸時代の文献資料からみる「唐様」の広まり ―書論・俗文学を中心に―」

神垣七重（広島市江波山気象館）【司会：永由徳夫】

- ④ 10:40～11:10 「田邊古邨における王澐受容について ―『論書牘語』を手掛かりに古邨の芸術論を考える―」

檜作直美（茨城県立茎崎高等学校）【司会：高橋佑太】

- ⑤ 11:10～11:40 「齊白石と日本人士の初期交流について」

浅野泰之（湖北師範大学）【司会：下田章平】

11:40～13:00 記念撮影・昼食

13:00～14:00 研究発表

- ⑥ 13:00～13:30 「後漢時代における「楷書系」の普遍性とその背景 ―文書行政の弛緩との関係に注目して―」

井田明宏（安田女子大学）【司会：矢野千載】

- ⑦ 13:30～14:00 「松下烏石の中国書法の受容に関する一考察」

峯岸佳葉（齋田記念館）【司会：高橋利郎】

14:10～15:20 記念講演

「上野三碑と書 ―日本石碑文化の原点として―」

前澤 和之 氏（群馬県文化財保護審議会専門委員）【司会：永由徳夫】

15:20～15:30 閉会式

※会期中の特別展示

「群馬大学が所蔵する古典籍」

於：群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館



大会記念講演講師紹介

前澤 和之（まえざわ かずゆき）氏

1946年、群馬県館林市生まれ。関西学院大学大学院文学研究科修士課程修了。専攻は日本古代史・博物館学。

群馬県立歴史博物館、横浜市歴史博物館等で勤務。群馬県地域文化研究協議会会長ほか要職を歴任、現在、群馬県文化財保護審議会専門委員。代表的な著作に『古代東国の石碑』（山川出版社、2008）、『上野国交替実録帳と古代社会』（同成社、2021）、『上野国交替実録帳を読む—千年前の県政白書—』（みやま文庫、2022）ほか、著書・論文多数。

大会に関する問い合わせ先

書学書道史学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 7F （株）毎日学術フォーラム内

Email: maf-syogaku@mynavi.jp FAX 03-6267-4555

※研究発表者・役員・幹事の方には、別途連絡事項があります。

企画局長より9月末までにメールでご連絡いたしますので、ご確認ください。

①梅舒適の篆刻作風について

—造形志向への転換期を中心に—

藤井 郁子

本発表は、昭和から平成にかけて活躍した篆刻家・梅舒適（一九一六—二〇〇八）が独自の作風を確立するまでの、戦後約十年間に焦点を当て、その作風の特徴と変化をもたらした背景要因を明らかにすることを目的とする。

戦後の篆刻は書道展の復活とともに発展した。日展、毎日書道展に加えて、関西では日本書芸院展や関西展が開催され、梅舒適はこれらの展覧会に草創期から継続して出品している。その印影は『日展史』のほか『書鑑』『墨美』『書品』などの書道雑誌で確認でき、これらを年代順、展覧会別に整理すると、作風の転換期が見えてくる。

展覧会草創期の梅舒適は、日展特選作「海上明月出」に見られるような古璽の形式を基盤とした作風を展開していた。しかし昭和二十八年（一九五三）の毎日書道展出品作「鬼神哭」以降、文字の造形性や余白を活かした章法が視覚的效果を高め、古典形式に捉われない造形志向が明確に表れ始める。実際、梅舒適はこの時期の制作について「今までの調子を破った感覚のもの」「造形的魅力に富むものを望みたい」と述べており、この頃が作風の転換期であったと考えられる。その後、日展において発表された「載鬼一車」「噩噩爾」「威百蠻」などの作品は、いずれも金文の造形性を積極的に取り入れ、余白、辺縁を効果的に活かした構成の特徴とする。本発表ではこれらの作品を対象とし、梅舒適が追求した「造形的魅力に富む」作品の具体的特徴を字法、章法の観点から分析する。

また、梅舒適自身の活動状況や村上三島ら書家との交流を手がかりとして、作風変化を促した背景要因を検討する。加えて、二世中村蘭台ら同時代に活躍した篆刻家の作風傾向を分析し、個性が求められた戦後篆刻界の中で、梅舒適の作風がどのような独自性と位置付けを示したのかを考察する。

（関西大学大学院）

② 民国期における篆刻の流派観

—「徽浙両宗」の対立と融合をめぐる—

林 崇 威

清代篆刻史において、「徽派」と「浙派」はしばしば対立関係にある二大流派として捉えられてきた。この認識の形成において重要な節目となったのは、清末に趙之謙が「巧拙論」によって「徽浙両宗」の風格と歴史的展開を論じたことである。この論説は民国期まで続く論争の発端となり、篆刻美学および流派観の展開に大きく寄与したことが、多くの研究者によって指摘されてきた。一方で、「巧拙論」は両派を対極的な評価軸のもとに捉え、その差異と対立を明確化する契機ともなった。また、同時代の魏錫曾は、趙の論説を擁護・補完する立場から、両派に共通する源流を指摘し、融合への志向を示した。ここには、流派の差異を明確化する「対立」と、分かれた流派の関係を捉え直す「融合」という二つの展開が認められる。さらに民国期に至ると、こうした展開のなかで、両派の継承者を誰に求めるのかという問題も浮上した。

本発表は、王夢筆編著『民国印学文論選注』（二〇二〇）などをもとに、民国期の流派に関する印論を整理し、「徽浙両宗」をめぐる対立と融合という二つの展開を背景に、流派の継承者問題にも注目しつつ、篆刻の流派観がいかに変容したのかを検討する。

継承者問題を考えるうえで注目されるのが、「徽浙両宗」をめぐる議論の起点となった趙之謙の位置づけである。管見の限り、彼を旧来の「徽派」と「浙派」のいずれに、またいかに位置づけるかについては見解が分かれていたが、「諸派の長所を得た」印人として評価する点では一定の一致が見られる。そこには、単一の流派への帰属よりも、諸派の融合を重視する新たな評価軸が認められる。さらに、民国期の印人についても、諸派の融合を重視して評価する言説が見られるほか、「流派」という枠組み自体の有効性を疑う見方も現れている。以上を踏まえ、本発表では、対立と融合が交錯する民国期の篆刻流派観の新たな展開を跡づける。

(筑波大学大学院)

③ 江戸時代の文献資料からみる「唐様」の広まり

—書論・俗文学を中心に—

神垣 七重

日本近世書道史の特徴として、唐様の書の隆盛が挙げられる。「唐様」の語義について、神田喜一郎氏をはじめとする先行研究では、江戸時代に流行した中国風の書を唐様とする見方が主流である。しかし、「唐様」という語の江戸時代における使用の実態を文献資料から明らかにした研究は管見の限りない。そこで本発表では、十七世紀後半から十八世紀末までの書論や俗文学を取り上げ、「唐様」がいかに表現されていたか明らかにし、その一因を考察する。まず、小塩幽照・滝幽伝『筆道秘伝抄』（一六九二年）から当時の「唐様」の捉え方を確認する。小塩は唐様の本質を理解せずに唐様が広まっていることに對し否定的な意見を持っていたことが読み取れる。次に、貝原益軒『和俗童子訓』（一七一〇年）、鳩谷孔平 指授・信龍伯麟等 編『學書捷徑』（一七七八年）から、両者が学び方に焦点を当てて唐様について言及する点に共通性を見いだせることを示す。

その上で、十七世紀後半から十八世紀末までに創作された俗文学の中から笑話、川柳を取り上げ、「唐様」がどのように扱われているか確認する。使用する作品は、『当世手打笑』巻三（一六八一年）、寓言子『初音草咄大鑑』巻二（一六九八年）、木室卯雲『麴鹿乃子餅』（一七七二年）の三つの断本、『川傍柳』三篇（一七八一年）、『柳多留』二十四篇（一七九一年）の二つの雑俳集である。これらの資料から「唐様が読みにくい」という風潮が浸透していたことが窺える。また、根来孝明氏の先行研究と、細井九阜『墨道私言』（一七七五年）における記述から、読みにくい「唐様」の一例が三井親和の書である可能性が考えられる。

最終的に、唐様は俗文学の享受者に対し「読みにくい」という印象を与えており、書に精通する人々も同様の印象を抱いていたため、唐様の広まりへの否定的な意見や、書論における唐様の学び方の著作が展開された可能性を指摘する。本発表を通じて当時の唐様隆盛の一端を明らかにすることができると考える。

(広島市江波山気象館)

④ 田邊古邨における王澐受容について

— 『論書牘語』を手掛かりに古邨の芸術論を考える —

檜作 直美

田邊古邨（一九〇三—一九八〇）は、書家・教育者として活躍するとともに、用筆論や芸術論に関わる多くの書論を著した人物である。その芸術思想はどのような思想的背景のもとに形成されたのであろうか。これまでの先行研究では、古邨の書教育や書論・芸術論を中心とした考察が行われ、その書学思想や教育実践について、一定の成果が蓄積されてきた。一方、王澐については、書法観や書論の特徴を明らかにする考察が行われている。古邨は、『田邊古邨全集』において清代の書論家・王澐を「大思想家」と評価している。しかし、両者の思想的関係に関する先行研究は、管見の限り見当たらない。そこで本考察では、王澐の用筆論『論書牘語』に着目し、古邨が王澐の思想をどのように受容し、自らの芸術論へと展開したのかを明らかにする。

考察方法として、『中国書論大系』に収められた王澐の『論書牘語』本文・訳注および王澐に関する『精萃図説書法論』の『論書牘語』解釈を参照する。これらを踏まえ、『田邊古邨全集』全八巻に収録された古邨による『論書牘語』講義を中心に比較考察を行う。

具体的には、王澐の『論書牘語』に示される書学思想を、次の三点から考察する。①連筆法における「正」と「奇」はいかなる関係にあるのか。②「自運」と「臨古」との関係とはなにか。③草書においていかなる方法が重要であるのか。これらの視点に対して、古邨はどのような解釈をし、何を理想としたのかを検討することで、王澐受容とその思想的意義を明らかにしたい。

本発表では、王澐の思想が、古邨にいかにか受容されたのかを考察する。さらに古邨による王澐受容は用筆論の継承にとどまらず、書的美を基盤とした芸術論へと発展していることを明らかにする。これにより、従来十分に検討されてこなかった王澐と古邨との思想的関係を解明するとともに、近現代日本書論における中国書論受容の一端を示すことができると考える。

(茨城県立茎崎高等学校)

⑤ 齊白石と日本人士の初期交流について

浅野 泰之

近代中国を代表する書画篆刻家・齊白石（一八六三—一九五七）は、湖南省湘潭の貧農に生まれながら、努力の末に新中国が称揚する人民芸術家へと大成した。齊白石と日本人士との交流については、同研究の第一資料として知られる『白石老人自述』において、本人はほとんど言及しておらず、かえって戦時中には「停止見客」を掲げ、日本人には絵を売らなかつたとの発言もあり、長年にわたり学界で本格的に論じられることはなかった。ところが、ここ数十年の間、主に中国の研究者によって部分的に当時の日本人士との交流が明らかにされてきた。もっとも、それらの成果は主に「日華絵画聯合展覧会」への参加や、齊白石作品の日本への伝播に焦点が当てられており、近代日中書法交流史からの観点から鑑みても、その全体像が十分に明らかにされているとは言い難い。

そこで発表者は、当時訪中した日本人士の記録や、齊白石が日本人士に刻した印を改めて精査した結果、一九二〇年北京で佐藤汎愛（北京国際観光局）との面識を得てから、一九四五年に長廣敏雄（美術史学者）が齊白石を訪問するまでの二十五年間が、とくに活発な交流の見られた時期であり、「停止見客」の期間中も日本人士との交流を継続していたことがわかった（拙稿「浅析齐白石书画作品一九二〇至一九四五年期间在日本的传播」『典藏古美術』三三七号、二〇二〇年）。この期間を三期に区分する。すなわち、第一期は日本人士との出会い、第二期は日本における齊白石受容の始まり、第三期は「停止見客」中の交流である。

以上を踏まえ、本発表ではその第一期に着目し、そこに具体的にどのような動きが存在していたのかを明らかにしていく。使用する資料としては、齊白石と日本人士との間で交わされた書簡、中国国家図書館蔵の初期の齊白石印譜、当時齊白石と交流のあった日本人士の証言記録など、これまで注目されてこなかった日中双方の一次資料を用い、多角的な分析を試みる。これらの史料を丹念に読み解くことで、齊白石と日本人士との初期の交流を再現するとともに、その後の交流の発展へとつながる端緒についても考察したい。

(湖北師範大学)

⑥後漢時代における「楷書系」の普遍性とその背景

—文書行政の弛緩との関係に注目して—

井田 明宏

後漢時代の簡牘等の書写資料において、楷書や行書といった後世の新書体に連なる系統（楷書系、行書系）が見出されることが指摘されている。しかし、その実態は未だ十分に解明されたとはいえない。発表者は旧稿で、後漢時代中期における楷書系の定型化の一端を指摘したが、楷書系に限られたコミュニティの中で用いられていた可能性は排除できない。楷書系の実態および書体変遷史上の位置を示すには、その通時代的な継承や、地域間の伝播の様相について考察する必要がある。

近三〇年、長沙市において、後漢時代中期から孫呉時代にかけての簡牘が隣接した場所から相次いで発見されている。また、二〇〇九年には浙江省湖州市から烏程漢簡が出土し、二〇二二年に図版が公開された。烏程漢簡の一部には後漢時代に書写された簡牘が含まれている。これらの簡牘を通覧し比較分析を試みることで、楷書系に関する前述の課題に対し、何らかの答えを得ることができだろう。

また、それらの楷書系を通覧すると、君教牘や律令簡のような謹直な書写意識が求められる公文書での使用が多いことに気づく。一方、後漢時代を含む漢代行政史研究の見地からは、後漢時代における文書行政の厳格さの「弛緩」が指摘されている。これは主に文書形式の観点からの指摘ではあるが、文書を書き表す文字および書法も文書形式の一部であるから、ここにも同様の弛緩を想定し得るのではないだろうか。もしその関係性が認められるならば、楷書系が公文書に用いられることの背景に文書行政の変容が想定できることとなり、楷書系萌芽の原因究明が一歩前進することとなる。

以上を踏まえ本発表では、楷書系が年代や地域の隔たりを超えた共通の様式を持つ、固有の型として認められるか、文書行政の弛緩と楷書系の萌芽との間に何らかの関係性が見出せるか、という問いについて考察を試み、後漢時代における楷書系の実像の一端を明らかにすることを目的とする。

(安田女子大学)

⑦松下烏石の中国書法の受容に関する一考察

峯岸 佳葉

発表者はこれまで江戸中期の唐様書家・澤田東江（一七三二～一七九六）について研究し、東江が明代書法の受容から王羲之法帖の本格的な受容へと転換したことは、唐様書の展開においても重要な転換点にあたると考えた。ただ、それ以前から王羲之は敬慕され、東江より約三〇歳年長の松下烏石（一六九九～一七七九）は王羲之廟を建てたという。烏石ははじめ佐々木文山・玄龍に学び、後に細井廣澤に師事し、また歐陽詢風の楷書も能くした。本発表では、烏石が如何なる考えにより各種の書体・書風を能くし、また王羲之法帖の本格的受容は何時まで遡り得るのかを明らかにしたい。

松下烏石の主な研究には、三村清三郎「烏石山人」『近世能書傳』一九四四年、米田彌太郎「烏石葛辰の書学論」『近世日本書道史論攷』一九九一年等があるが、烏石の事跡や書論を主とし、実作についての詳細な検討はなされていない。

そこで、発表者は本学会二〇二四年度研究促進助成を得て、九州大学附属図書館蔵の中野三敏旧蔵和刻法帖のうち松下烏石の墨帖全五四種を調査する機会を得た。これらは、『新訂版 享保以降江戸出版書目』（臨川書院 一九九三年）に見られる烏石の墨帖四一点の約四割と一致すると考えられる。調査の結果、九大蔵本のなかでも初期の四〇歳代から歐陽詢風の楷書と明代風の行草書が行われ、その傾向は晩年まで続いた。ただ、明和二年（一七六五）の識語のある『千字文』は篆・八分・草・行・真書の六巻よりなり、行書は王羲之風に見え、また草書の巻の存在も注目される。折しも、宝暦一四年（一七六四）の澤田東江編・韓天壽校『法書復古編』は、中国書論より古碑や古法帖、蘭亭石本等の記述をまとめ、復古への意思を示した。韓天壽ははじめ烏石に学んだとされ、宝暦・明和の頃、彼らの間で急速に王羲之法帖の受容が進んだことが窺われる。王羲之を敬慕した烏石にあっても、歐陽詢の石碑の受容が先行するのは、後年になって王羲之法帖を学ぶことのできる環境がにわかに整ったことを意味するのではないだろうか。

(齋田記念館)

シンポジウム概要

近代東アジアの〈官展〉と書

昨今、近代東アジア各地域の「美術」や「書」をめぐる制度的な回顧が、顕著な成果を挙げています。例えば、福岡アジア美術館・兵庫県立美術館等の連合による「官展にみる近代美術」展は、内外に好評を博した成果の一つです。今回シンポジウムは、この成果を受けて、近代東アジア各地域に展開した官設の美術展覧会（官展）について、それを「書」の立場から再検証するものです。パネリストには、日本、朝鮮、台湾、満洲の各ケースをご報告いただきます。ご報告の中から、例えば各展の開催趣旨や出品作のジャンル構成、あるいは関係者の書に対する意識や実際に出品された書作品の傾向など、種々の観点により各展を横断的に比較し、近代の「美術」と「書」の関係を再考する示唆を得ようと思います。

〈基調報告〉

「日本書道作振会展覧会・泰東書道院展覧会（日本）」

柳田さやか氏（島根大学）

日本の官展は明治四〇年（一九〇七）の文部省美術展覧会（文展）に始まる。以後、昭和三年（一九四八）の日本美術展覧会（日展）に第五科（書）が新設されるまで、官展に書の部門はなかった。戦前の書家達は、官展設立当初から参画運動を展開していた一方、書道団体を設立して書独自の展覧会を開催していた。本発表で着目する日本書道作振会は大正一三年（一九二四）に結成し、一度分離したものの、昭和五年（一九三〇）に泰東書道院として再結成した。そのため、両会の人員や理念活動は共通している面がある。両会の全国規模の展覧会（漢字・仮名・篆刻）、書の普及振興運動を通して、書家達の官展への意識、美術界の書への意識を検討する。

「朝鮮美術展覧会（朝鮮）」

金貴粉氏（国立ハンセン病資料館）

本発表では、一九二二年から一九四四年まで朝鮮総督府が開催した朝鮮美術展覧会（朝鮮美展）の書部門を対象に、その設置と廃止の過程を通して、植民地朝鮮における書の位置づけを考察する。朝鮮美展は、日本の官展には存在しなかった書部門を開設当初から設置したが、「書は美術ならず」という議論を背景として第一〇回展で廃止された。本報告では、書部門設置の背景と廃止に至る経緯を整理するとともに、朝鮮人・日本人書家の言説、審査体制を分析し、官展制度が近

代朝鮮の書に与えた影響を明らかにする。その上で、日本本土とは異なる制度設計のもとで展開した朝鮮美展書部門の特徴を示し、戦前の官展における書を東アジアの視点から再考する。

「台湾の書壇・書画会と日本の書道展（台湾）」

柯輝煌氏（東京大学大学院）

一九二七年に創設された台湾美術展覧会は、帝国美術院展覧会をモデルとして設立されたが、そこでは東洋画部・西洋画部のみが設けられ、書部は設置されなかった。本発表では、当時の台湾書家が独自に書壇や書画会を結成する一方で、書道作振会、日本美術協会、泰東書道院をはじめとする内地の主要書道団体の展覧会に参加した実態に着目する。具体的には、澹廬書会や麗沢書画会などの組織や、黄祖輝（一八九六—一九六一）や李讚生（一八九〇—？）ら書家の活動を手がかりに、日本書壇との人的・制度的ネットワークを分析することで、台展における「書」の不在が植民地台湾の書道界に与えた影響を考察する。あわせて、一九三〇年代後半の台湾における書道熱と植民地下の言語・文化政策との関係について再検討したい。

「満洲国美術展覧会（満洲）」

徳泉さち氏（日本大学）

満洲国美術展覧会は一九三八年から一九四五年まで計八回、「新京」で開催された官設公募展である。東洋画、西洋画、彫刻、工芸と並び書部門が設けられ、中国人、日本人、ロシア人やモンゴル人などの書作品が展示された。初期は「満洲国」政府高官でもあった羅振玉や鄭孝胥らが運営の主導権を握るが、時局の変化に伴い、中盤以降は次第に日本人側の意向が表面化していった。民族共和国建国精神を顕現するための美術展という趣旨のもと、漢字文化圏共通のメディアとして書が重視されたが、その一方で後半期には仮名書道が奨励され「満洲国」に普及させようとする動きもあった。本発表では、日満の融和と同化という矛盾が書部門にどのように反映されてくるのか考えてみたい。



〈群馬大学荒牧キャンパス 共同教育学部〉